

追悼

## 永安先生の思い出とその学問的意義

保坂 俊司

### 出会いと学び

恩師永安先生が亡くなられて早二年になろうとしている。ここ数年体調が思わしくないとはいわなかったが、これほど早く幽明境を異にすることになろうとは、想像もしていなかったことに不明を恥じるばかりである。

というのも私は、先生が最後の入院をなされる直前に、図らずも遺著となってしまった『経済の哲学』（麗澤大学出版会、二〇〇八年三月）の原稿を直接手渡されていたからである。そのときは、私が『麗澤学際ジャーナル』の編集担当となり原稿を探している旨をお伝えしたことに對する先生からの励ましと簡単に考えていた。しかし永安先生は、ご自身に何かあったら出版するようにと、この原稿を私に託してくださいとのだと後で気付いた次第である。

同著については、すでにご覧になった方も多いと思われるので、紹介はこのくらいにして、永安先生の追悼のために私的な出来事を中心に、以下、思い出を語らせていただく。

## 出会いとその後

永安先生に初めてお会いしたのは、早稲田大学社会科学部のゼミにおうかがいしたときであった。たしか一九七八年頃であっただろうか？ 永安先生はちょうどその年の早稲田大学からの派遣による英国留学の直前であり、多忙な日々を過ごされていた。私は個人的な紆余曲折もあり、かなり年嵩の行った学生であった。どうした理由か、永安先生はややヒネた学生である私に非常に優しくしてくださいました。周辺の学生が先生を恐れるのに、私はそのような記憶が全くないのである。あるいはそれは私が鈍かったのかもしれない。

いずれにしても先生には、その後三十年の間面倒を見ていただき、まさにその学恩は言い尽くせないものがある。

ただ、私が学生の時代の二年間、永安先生はイギリスに留学されており、実質的にゼミでの指導は最後の半年くらいであった。そのときの、群馬県の霧積温泉でのゼミ合宿は印象的であった。霧積温泉は信越線の横川駅から八キロほど山間に入るのだが、この行程を全員裸足で旅館まで歩いたのである。先生は自然を体感するには「裸足が一番」ということをよく仰っており、谷川温泉での合宿でも、しばしば裸足で雪中行軍した。あの寒さや痛さは今となっては、学生時代の貴重な体験である。

勿論、先生の学問指導は厳しく、時に泣き出す生徒もいた。しかし、それは生徒の側の怠慢であったり、甘さが見えるときであった。しかし、厳しい指導が終われば後は、一緒に風呂に入り、談論風発し時の経つのも忘れるほどであった。

永安ゼミは来るものは拒まず、去るものは追わずで、ずいぶんいろいろな人材が出入りしていた。その結果、現在社会的に活躍する人材を多数輩出している。その業種は、国会議員から私のような社会的に余り役に立たない学者までといったところである。

私は、一九八二年から八四年までインドに留学し、帰国後、また先生のゼミで勉強させていただいた。それは一九九二年の麗澤大学への奉職まで続いた。

その間、難波田先生のおすすりめもあり、永安先生は若さと無鉄砲なだけの私にいろいろな研究の機会を与えてくださった。

#### 永安先生との印象深い思い出

特に永安先生との印象深い思い出となったのが、一九九二年にアメリカのオハイオ州の州都コロンバスで開かれた第二回世界経済倫理学会の国際大会である。このとき永安先生は、私に、仏教の経済倫理を仏教代表として発表するという大役を与えてくださった。実は、実際に参加するまでどれ程の学会なのか知らなかった私は、コロンバスに到着してその大会の大きいことに驚き、その後発表が終わるまでの殆どの記憶がない程に緊張したことを覚えている。

何しろ、オハイオ州の議事堂を使った大会には、世界二〇ヶ国以上から四〇〇人を超える学者や経済人などが集まった。開会式には、ビデオ映像であったが、英国のチャールズ皇太子が映像メッセージをくださったし、アメリカやドイツ連邦銀行の前総裁なども参加されていたのである。また、ちょうど大統領選挙の年にもあたっており、当時大統領候補者であった大富豪のロスベロー氏も参加し、長いスピーチを行って

た。

実は、永安先生はこの経済倫理学会の日本における代表者であり、その開催に非常な努力をされ、多くの学会幹部から感謝されていたことを改めて思い出す。日本からも麗澤大学の望月先生や早稲田大学商学部の経済倫理の専門家の小林教授が、オブザーバーとして参加されていた。また、モラロジー研究所からは望月先生をはじめ、二〇人近いモラロジアンの方々が参加されていた。

盛大な開会式の後、私の参加するプログラムが始まった。当初、普通の学会発表、つまりセクションに別れて発表するくらいにしか思っていなかった私が、いきなり巨大なステージの上で発表することになるとは思ってもみなかった。しかし、実際には仏教の代表者として、キリスト教、イスラム教、そしてユダヤ教の代表者とパネルディスカッションを、全体参加者の前ですることになっていたとは、本当にびっくりした。何しろ、隣がキリスト教代表のイギリスのキングスカレッジの院長、さらにその隣がマルクスそっくりのイスラエルのエルサレム大学経済研究所長、そして左隣が、イスラム研究で名高いニューヨーク市立大学の先生と、私以外はみな世界に名の知れた大先生であった。

そのような世界的な大家の先生方と肩を並べて話をするわけだから、緊張するのは当たり前であった。ただ仏教の分野で、経済学的な視点から研究をしている学者が日本では少ないのが当時も今も変わらない状況であった。この分野では、インド哲学や仏教学の泰斗であり、私の師であった故中村元先生が、すぐれた著作や沢山の論文を書かれており、永安先生は、いわば中村元先生の代理として話をするようにとお考えになっていたのかもしれない。いずれにしても、大役であったが、なんとかプログラムをこなしただと、永安先生から「君は度胸があるな」という言葉をいただいたことが、今でも思い出される。

その後、ワシントンからボストンへ飛びハーバード大学を訪れ、さらにサンフランシスコでスタンフォード大学のフーバー研究所を訪問し、永安先生の友人の先生方を紹介していただいた。永安先生は顔が広くて、全米に友人がいらしたことに驚いた次第である。

アメリカ国内のいくつかの経済学会でも同様の発表を行い晴れて帰国したのは、永安先生のご紹介で麗澤大学国際経済学部専任講師として就任し、初めて迎える入学式二日前であった。

その後も、先生は何かと学会発表や仕事を世話してくださり、気がつくとも自分でも考えられないほどの視野や経験を積ませていただいたのであった。特に、永安先生の真実や時代を洞察する目というか、勸には天才的な冴えがあり、またその視野の広さは、前述の人脈にも表れているが、学問領域においても顕著であった。そしてその天才的な高見から、私のような凡才に指示が来るのである。その結果、右往左往することがしばしばであったが、しかし不思議なことに、先生のご指示を曲がりなりにともやり遂げると、いつの間にか大きな視野が開けているのである。現在、宗教研究や宗教と社会科学、特に、宗教思想と経済思想の関係などで、私が研究者としてやってゆけるのも、永安先生の厳しくも慈愛あふれる指導や助言のお陰である。

### 野武士的経済学者

永安先生は自ら「野武士」と称されることがよくあった。永安先生には、無骨な点があり誤解されやすいところがあったが、永安先生の人柄をよくあらわしているのではないだろうか。永安先生は権威や権力に対しても遠慮というものがなかった。周囲が気をもむほどに、物事をはっきり口にされる先生で、その意味で誤解を受けたことも少なくなかったのではないだろうか。しかし、永安先生の無骨ではあるけれども誠実

で、真摯な人柄に魅了される人も多かった。特に経済学会などでは、永安先生は随分と尊敬されていた。

しかも先生は一種の予知能力の持ち主であった。先生は一般の学者より十年以上先のことを常に見ておられた。一九七〇年代の終わりには、既に現在のPC時代を予想されておられ、盛んにPCの勉強をするように我々に勧めておられた。その結果、PC関連の会社を立ち上げた卒業生もいる。さらに、経済倫理の重要性を一九八〇年代の半ばから仰っており、今日の「〇〇倫理」研究、特に企業倫理や医療倫理の分野は、永安先生が切り開かれた分野である、といっても過言ではないであろう。

さらに、最近のアメリカ型金融資本主義、というより略奪型金融偏重の経済構造に、永安先生は早くから異を唱えておられた。特に、小泉改革を扇動した経済学モデル、つまり現在のサブプライムローンなどを生み出した金融工学やアメリカ型の開放経済の破綻を危惧され、盛んに批判されていた。しかし、当時の世相はアメリカ型経済を礼賛し、煽情する経済学者ばかりで、その危険性について言及する経済学者はいなかった。永安先生はよく「あのような経済学は、滅びの経済学だ。長続きしない。今必要なのは自然と共に歩く経済学である」と言われていた。事実先生は、環境問題にも一九八〇年代の初めから強い関心を示しておられた。

先生の学問の基本が農業経済学であったことも原因していようが、先生は近代経済学の主流である「配分の正義」だけでは不十分で、「生産性の向上（農業など）」と配分の正義、さらに消費や排出（環境）を含めた総合的な視点からの経済システム」の構築が不可欠と常に考えておられた。だから、先生の著作は自然の生産力の向上を含めた経済構築はいかにすべきか、あるいは環境問題と経済の関係を考えられていた。また、それは結果として人間の幸福につながるものでなければならぬとして、経済学と哲学さらには宗教と

の関係性を非常に重視したものであった。

このような永安先生の学問の、経済学を中心にした人間の幸福学の構築への期待にも似たアプローチは、永安先生の学問領域を見れば一目瞭然である。ところで、何故永安先生はこのような総合的な幸福の学への道を志されたのであろうか？

私はそこに廣池博士への永安先生の心からの尊敬があったのではないかと推測している。恐らく今頃は、彼の世界において廣池博士と語り合われている事であろう。

永安先生のご冥福を祈ると共に、その学問の一端でも継承できればと願っている。

なお、現在我々永安ゼミの卒業生は永安先生の教育の事跡を辿ろうと、永安ゼミで用いた教科書や参考書をピックアップしている。この困難な仕事は、武者英之氏（永安ゼミ出身（一九八六年）、三協物産株式会社代表取締役）によって進行中である。しかし、まだ不十分であり、読者の中に新しい情報をお持ちの方は、是非保坂俊司までご一報御願ひ申し上げます。

## 永安ゼミ「必読文献リスト」復刻版（試案）

2007年10月17日  
武者英之氏 作成

	書名	著者名	発行/発表	出版社/発表媒体	備考
1	経済学のフロンティア （講座 現代経済思潮 第4巻）	共著	1978年	東洋経済	玉野井芳郎教授先生 東大退官記念論文 集、栗本慎一郎氏が 経済人類学の論文寄 稿、編者に清成忠男 氏
2	現代経済文明の生態学 —自然 経済 思想—	単著	1978年	前野書店	「社会システム論」 レポート課題図書
3	国民経済の形成原理 —内部発展論のパラダイム—	単著	1978年	早稲田大学出版 部	
4	政治経済学	単著	1981年	成文堂	「社会システム論」 講義テキスト、1990 年増補版
5	社会科学のこころ —ゆらぎ文化の知を語る—	単著	1989年	成文堂	
6	経済学のコスモロジー 【地球環境時代の経済原論】	単著	1991年	新評論	日経経済図書賞候補
7	スラッファ分配理論の構造	論文			東大修士論文？、 「現代経済文明の生 態学」巻末記載の略 歴参照、スラッファ は「ケインズサーカ ス」の一員
8	労働価値説の意味	論文			「現代経済文明の生 態学」巻末記載の略 歴参照
9	文明としての経済	共著		潮出版社	同上
10	経済発展と社会福祉	共著		税務経理協会	同上
11	現代法の新展開	共著		新評論	同上
12	自然と人間のための経済学	共著		朝日新聞社	同上
13	先進国・発展途上国地域開発 論の承譜（上・下）	論文			同上
14	社会システムの構造と認識	論文			同上
15	転換期の経済政策	共同編集	1984年	中央経済社	「社会科学総合研 究：経済発展論」講 義テキスト
16	モラロジー経営原論 —品性資本と企業生命力—	編著？	1984年	廣池学園出版部	モラロジー研究所経 済研究室長として全 面的関与、巻末の参 考文献リストが充実 している
17	一般システム理論 —その基礎・発展・応用—	フォン・ベ ルタランフ イ	1973年	みすず書房	
18	社会システム論	公文俊平	1978年	日本経済新聞社	
19	マルクス経済学と近代経済学	玉野井芳郎	1966年	日本経済新聞社	
20	エコノミーとエコロジー	玉野井芳郎	1978年	みすず書房	

21	国際関係論（上・下）	衛藤しん吉 他著	1980年	東大出版会	公文俊平氏が共同執筆
22	文明としてのイエ社会	村上泰亮他 著	1979年	中央公論社	同上
23	成長の限界 —ローマクラブ「人類の危機」レポート—	D・H・メ ドウズ他著	1972年	ダイヤモンド社	
24	第三の波	アルビン・ トフラー	1980年	日本放送出版協 会	
25	脱工業化社会の到来	ダニエル・ ペル		ダイヤモンド社	
26	経済学を超えて —社会システムの一般理論—	ケネス・ E・ポール ディング	1975年	学習研究社	公文俊平氏が訳者
27	新訂 人間復興の経済 —Small is Beautiful—	E・F・シ ュマッハー	1977年	佑学社	
28	経済の文明史 —ポランニー経済学のエッセ ンス—	カール・ポ ランニー	1975年	日本経済新聞社	玉野井芳郎氏が編訳
29	ヒューマニクス序説 —経済学と現代世界—	篠原三代平	1984年	筑摩書房	
30	「甘え」の構造	土居健郎	1971年	弘文堂	
31	文明の生態史観	梅棹忠夫	1967年	中央公論社	
32	風土	和辻哲郎	1979年	岩波文庫	
33	歴史とは何か	E・H・カ ー	1962年	岩波新書	
34	宗教的自覚と人間形成	下程勇吉	1970年	廣池学園出版部	ゼミ合宿にて分担発表
35	増補 二宮尊徳の人間学的研究	下程勇吉	1980年	廣池学園出版部	同上
36	日本の近代化と精神的伝統	モラロジー 研究所編	1985年	廣池学園出版部	同上、永安先生は「洪沢栄一」を分担執筆
37	心療内科	池見西次郎	1963年	中公新書	
38	続・心療内科	池見西次郎	1973年	中公新書	
39	森嶋通夫				
40	ホロン革命	アーサー・ ケストラ			
41	科学と日常性の文脈	村上陽一郎			
42	エネルギーとエントロピーの 経済学	槌田 敦			
43	日本資本主義の精神	山本七平			
44	非まじめのすすめ				